

新産地報告 (10)

上野 勝典*・上野 由貴枝*

New localities of some plants in Nagano Prefecture (10)

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

ナンブワチガイソウ (ナデシコ科)

Psuedostellaria japonica 写真1

・富士見町富上見高原 1200 m 2014年5月30日 NAC170451

やや日あたりの良い広葉樹林下を歩いていたときに、あちこちに白い小さな花をつけた植物が小群落をつくっているのを見つけた。初見の植物だったため、よく調べてみたところ、対生する葉が離れてついており、葉の両面に毛があり、花が頂部と葉腋についている特徴から、ナンブワチガイソウであった。県内では東部の一部にのみ自生が確認されており、富士見町では記録がなかったが(長野県 2002)、長野県植物誌(清水 1997)には富士見高原での採集記録があると記されている。近年、減少しているということで、当地も別荘地等の開発が進んできており、絶滅が心配される。

ミヤマナミキ (シソ科)

Corydalis orthoceras 写真2

・根羽村万馬瀬 600 m 2014年7月26日

スギ林内の暗い溪流脇を歩いていたときに、ミヤマナミキがまとまって咲いているのを見つけた。ミヤマナミキは未確認種とされていたが、近年廣江伸作氏によって茶臼山で確認された(廣江 2012)。関東地方以西に分布し、頂生の花序をつけ、荒い鋸歯のある広卵状三角形の葉をつけるなどの特徴がある。今回見つけた場所は愛知県との県境に近い根羽村になる。

ヤマトテンナンショウ (サトイモ科)

Arisaema longilamium

・岡谷市高尾山 1000 m 2014年6月22日
・辰野町小野峠 1000 m 2014年6月22日
NAC191929

2012年に塩尻市にてヤマトテンナンショウが多く生育していることを見つけていたが(上野・上野

2013)、同じ山塊の岡谷側、辰野側でも広くヤマトテンナンショウが生育していることがわかった。芹沢(1997)は辰野町で本種を記録している。触部の幅が狭く、また筒部よりも長くなる特徴から、比較的容易に他のテンナンショウ類と区別できる。本種は群馬県から紀伊半島にかけて点在する日本固有の植物である(加藤・海老原 2011)。

ウラシマソウ (サトイモ科)

Arisaema thunbergii

・岡谷市塩尻峠 1000 m 2014年7月5日

北向きの急斜面のスギ林下に、ウラシマソウが点々と生育しているのを見つけた。付属体の先端が糸状に長く伸びるので、ほかのテンナンショウ類と容易に区別できる。ウラシマソウは全県に分布するものの、個体数は少なく稀にしか見ることがない。以前に天龍村の数か所で観察したことがあり、また新潟県側の糸魚川付近では普通に見ることができる。北海道から九州北部まで分布する日本固有の植物である(加藤・海老原 2011)。

キンセイラン (ラン科) *Clalanthe nipponica*

・信濃町黒姫山 900 m 2013年6月15日

黒姫山のスギ林下を歩いていたとき、ところどころにつぼみを持ち上げたキンセイランが見られた。キンセイランは葉の幅が狭く、やや光沢があるなどの特徴があるため、葉だけでも容易に区別ができる。長野県では北部に多く見られるように思う。以前、白馬村や塩尻市にて観察したことがあるが、信濃町での記録はなかった(長野県 2002)。

クロクモキリ (ラン科) *Liparis* sp. 写真3

・木曽町三岳 900 m 2014年6月29日
NAC171932

湿った溪流脇のスギ林下を歩いていたとき、クモキリソウのようなものを見つけた。葉はクモキリソウによく似ているが、花序がより高く、花はあまりまとまって咲かない。花卉の色は緑色ではなく濃い

* 上野勝典・上野由貴枝 〒399-0011 松本市寿北 2-2-38



写真1 ナンプワチガイソウ 富士見町
2014年5月30日



写真2 ミヤマナミキ 根羽村
2014年7月26日

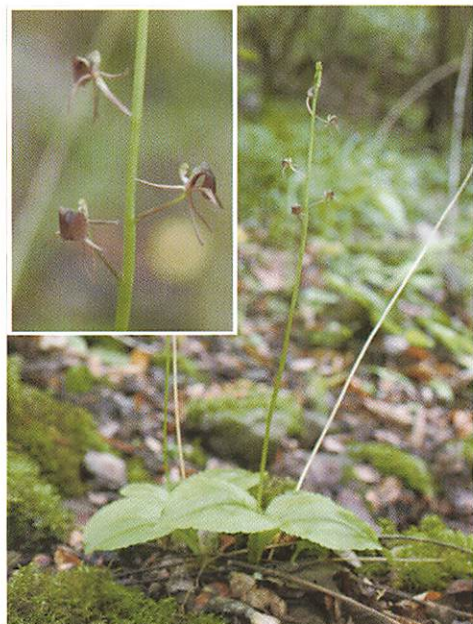


写真3 クロクモキリ 木曽町
2014年6月29日



写真4 トラキチラン 伊那市 2014年8月2日



写真5 カイサカネラン 伊那市 2014年9月15日

紫色をしており、よく見てみるとクモキリソウと比較して、背萼片の花柄につく角度が狭いなど形状の違いも見られた。国立科学博物館の遊川知久氏により写真でクロクモキリと同定して頂いたが、本種はまだ正式に記載されていないとのことだった。クロクモキリはだいぶ以前から知られていたようで、高橋（1987）には山梨県と静岡県に産するとして、山梨県産の写真が数枚載っている。また、南信濃村

教育委員会 (2005) には、クモキリソウの花が紫褐色の型をクログモと呼んで区別し、故井上健氏が研究していたことが植物体の写真とともに記録されている。中島 (2012) には、南信濃村の標本の線画が出ており、学名も書かれているが、上記のように正式には記載されていないために裸名である。長野県 (2014) では、戸隠村の標本があるが生育状況がわからないので、情報不足としている。

トラキチラン (ラン科)

Epipogium aphyllum 写真 4

・伊那市長谷小黒川 2014 年 8 月 2 日
NAC171931

やや明るいカラマツ林の縁に数株のトラキチランが咲いていた。通常では 9 月ころに見かけるが、8 月上旬に見るのは異例の早い時期と思われる。以前、大鹿村豊田山や八ヶ岳で見たことがある (上野・上野 2005)。

カイサカネラン (ラン科) *Neottia furusei* 写真 5

・伊那市長谷小黒川 2014 年 9 月 15 日
NAC171933

上記トラキチランの咲いていたのとはほぼ同じ場所に、カイサカネランが 5 株ほど出ているのを見つけた。カイサカネランはサカネランと比べるとやや緑色がかっており、また唇弁が 3 列して両側の裂片はサカネランのように外側には曲がらないなど、容易に区別できる。長野県では初めに長谷の戸台で古瀬義氏によって発見されたがその後見つからなくなり、釜無山地で再発見された (今井・井上 1998)。

今井・井上 (1998) には産地の地名が出ていないが、長野県 (2002) には富士見に記録されている。今回見つけた場所は長谷であり、戸台と釜無の中間あたりに位置している。また、近年高山村でも見つかったとの報告がある (井浦 2008)。北海道でも最近見つかっており (内田・滝田 2007)、北海道と本州中部に隔離分布する日本固有の植物である (加藤・海老原 2011)。

謝辞

本報告の作成にあたり、貴重な情報と助言をいただきました長野県環境保全研究所 & ハーバリウム (NAC) の大塚孝一様には、心より感謝いたします。

引用文献

- 井浦和子 (2008) 長野県高山村におけるカイサカネランの新産地. 長野県植物研究会誌 41: 47-48.
- 内田暁友・滝田謙譲 (2007) 北海道におけるカイサカネラン (ラン科) の産地. 知床博物館研究報告 28: 7-8.
- 今井建樹・井上建 (1998) カイサカネラン再発見される. 植物分類地理 49: 197-199.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2005) 新産地報告 (2). 長野県植物研究会誌 38: 137-138.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2013) 新産地報告 (8). 長野県植物研究会誌 46: 115-118.
- 加藤雅啓・海老原淳編集 (2011) 日本の固有植物. 東海大学出版会.
- 清水建美監修 (1997) 長野県植物誌. 信濃毎日新聞社.
- 芹沢俊介 (1997) 長野県のテンナンショウ属. 長野県植物研究会誌 30: 1-15.
- 高橋勝雄 (1987) 日本野生ラン花譜 Vol.3. 毎日新聞社.
- 中島睦子著 大場秀章監修 (2012) 日本ラン科植物図譜. 文一総合出版.
- 長野県 (2002) 長野県版レッドデータブック 維管束植物編. 長野県自然公園協会.
- 長野県 (2014) 長野県版レッドリスト 植物編 2014. 長野県.
- 廣江伸作 (2012) 茶臼山植物雑記. 長野県植物研究会誌 45: 35-38.
- 南信濃村教育委員会 (2005) 南信濃村植物誌一遠山郷に生きる植物たち一. 南信濃村.